The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井履軒の印章
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懐徳堂センター報. 2008, 2008, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24393
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂センター報２００８　（大阪大学大学院文学研究科・文学部 懐徳堂センター　２００８年２月２９日発行）

中井履軒の印章

湯　浅　邦　弘

はじめに

前稿「中井竹山の印章」（『懐徳堂センター報2007』、大阪大学大学院文学研究科、2007年）に続き、本稿では、中井履軒の印について検討する。

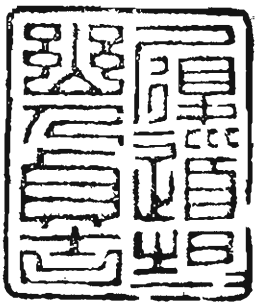
履軒は、竹山の二歳年下の弟で、竹山と同じく懐徳堂内で生まれ幼少期を過ごしたが、後に懐徳堂とは一定の距離を置き、私塾水哉館において独自の境地を開いていった。『周易』『書経』などの経書（中国儒教経典）に関する膨大な研究は、『七経雕題』『七経雕題略』を経て、『七経逢原』として集大成された。また、現在にいうところの自然科学の分野についても興味を示し、人体解剖図説である『越俎弄筆』や、天体図である「天図」、顕微鏡の観察記である「顕微鏡記」、動植物図鑑である『左九羅帖』などの業績も残した。

人柄も一風変わっていたようである。先に竹山の印で、光格天皇にちなむ「天子知名」印を紹介したが、履軒はこの印にも格別の思い入れがなかったようで、行方しれずにしてしまったという。竹山の「天子知名」印は今に伝わっているが、履軒のそれは、その性格が災いして散逸してしまったのである。また、竹山が懐徳堂学主として対外的に活躍したのに対し、履軒は、人付き合いが苦手で、高名な文人の来訪や諸侯の招聘に際しても、裏口から抜け出したり、押入に隠れたりして面会しなかったという。要は、兄竹山が懐徳堂学主として表舞台に立ったのに対して、弟履軒は、より自由な境地で人生を謳歌したのである。そうした履軒の人生は、はたして印章の中に反映されているであろうか。

なお、以下でとりあげる印の番号01・02などは、後掲の「中井履軒印データベース」に対応している。番号の意味については、後述の第４章参照。

１．「履軒」の号

まず、履軒の号の由来を示す印として「履道坦々幽人貞吉」印（02）がある。これは、『周易』の語にちなむ語である。『周易』履卦に、「道を履むこと坦坦たり。幽人貞にして吉」（履道坦坦、幽人貞吉）とあり、その象伝に「幽人貞吉とは、中自から乱れざるなり」（幽人貞吉、中不自亂也）と説く。正しい道を坦々と履んで野に隠れている人であれば、その心中が穏やかで欲によって乱されることがないから、正しくて吉であるという意味である。履軒の号の出拠となったもので、私塾の名に使った「水哉」にも通ずる履軒の人生観を反映した語である。



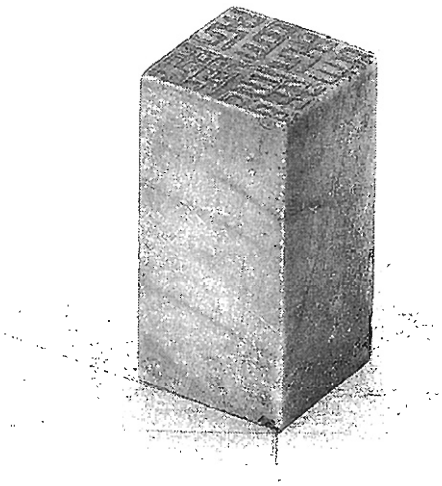
この印文の中で、「坦」の字には少し注意を要する。「坦」が一字しかないように見えるが、よく観察すると、「坦」の右下に重文符号「=」が入っている。今の畳み字「々」に該当する符号である。これにより「坦々」と読ませるのである。「坦坦」と同じ字を二つ同じように刻むと印面構成の上からバランスが悪くなると判断されたのであろう。

履軒の印の中には、この他、同文の連印かつ両面印（09・10）がある。連印とは、一顆に複数の印面が含まれるものである。一度に二つ以上の印面が押印されることになり、名前や雅号を分けて刻む場合が多い。竹山の印の中にも、「積善」と「子慶」の連印が見られたが、この印の場合、さらに面白いのは、同時に両面印になっている点である。つまり、一面に、陰刻で「履道坦坦」と「幽人貞吉」とが連印を構成し、同時に、その裏面にも、陽刻で「履道坦坦」と「幽人貞吉」との連印が構成されているのである。懐徳堂印の中でも、きわめて珍しい印である。

なお、この印文の中で、陰刻の方の「履道坦坦」に注目しておこう。この「道」の字は、篆書ではなく、戦国時代以前の古文の字形で、甲骨文字にも「𢓊」のような例が見られる。

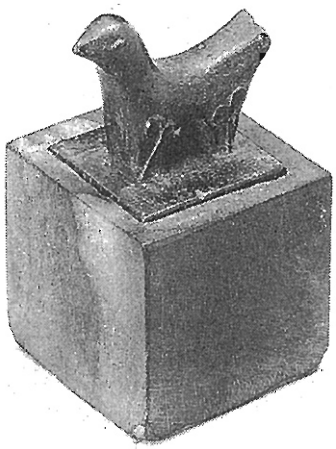
同じく、号にちなむ印としては、この他、「幽人」(15・17・18)「幽人之貞」(03)「幽人貞吉」(05・33)「履道坦々」(32) 印など、類似の印が数多くある。「幽人」は、右の『周易』の言葉にあるとおり、正しい道を踏んで野に隠れている人をいう。常に兄竹山のかげに隠れていた履軒の姿を表しているであろう。

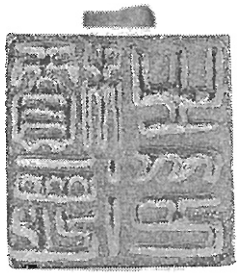
また、同じく号に関わるものとして、「尚徳積載」印 (43)、および「既雨既處」印 (44) の両面印がある。出典はいずれも『周易』で、小畜(しょうちく)の卦に「既(すで)に雨ふり既に処る。徳を尚びて載(み)つ」(既雨既處、尚徳載) とある。すでに雨が降り陰陽の気が安らかな状態にあることを表す象で、陰の徳が積み重ねられ満つることを説く。なお、この両印の篆刻者は、尾張藩大坂屋敷の役人で篆刻に長じていた中西石樵(せきしょう)である。

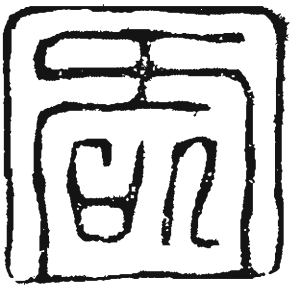


『懐徳堂印存』にはこの他、「既雨既處尚徳積載」(64) 印もある。ちなみに、履軒の名は積徳、幼名は徳二、字は処叔である。

この名と字にちなむ興味深い印をとりあげておこう。「積徳之印」(28)「處」(29)の子母印である。子母印とは、一つの印の中に、母（大）子（小）二つに分離した印が入れ子になっているものをいう。ここでは、紐に、正体不明の四つ足の動物がかたどられ、その母印は陽刻の「處」である。處は処の旧字体で、履軒の字の処叔に由来する。ところが、この印は入れ子になっていて、その中にもう一つの子印を含む。その印が陰刻の「積徳之印」である。造形という点でも、興味をひかれる印である。



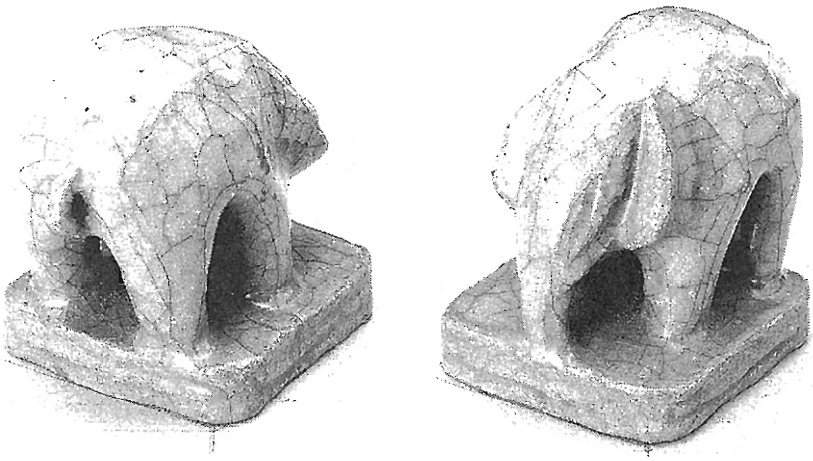




母印「處」

子印「積徳之印」

同様に、造形の妙という点で興味深いのは、陶製の「處」印（31）である。この印は、右の子母印の母印と同じく、履軒の字に由来しているが、見逃せないのは、紐が象をかたどっている点である。懐徳堂には、この他にも、象紐の印が散見されるが、これは、当時、長崎に象が輸入され、世間の注目を浴びていたことによると思われる。享保13年（1728）、中国の商人が時の将軍徳川吉宗に献上するため、象二頭を長崎に上陸させた。雌の方は長崎で死んだが、雄は江戸に送られることになった（石坂昌三『象の旅―長崎から江戸へ』（新潮社、1992年）参照）。大坂を通過した象の話を履軒も伝え聞いていたのであろう。大阪大学には、履軒の書と伝えられる「象図」が残されている。なお、この印の側面には「自製」と注記されているので、履軒自身の製作である。印文の一辺が四センチという比較的大振りな印である。



2．超俗の境地

さて、これらはいずれも『周易』を出典とする、履軒の号や字にちなむものであるが、これに対し、履軒の超俗的な性格を表明した印に次のようなものがある。

①「水哉」印（26）

②「天樂」印（37）

③「酔郷侯印」印（40～42）

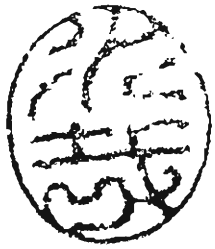
④「南柯守印」印（45）

⑤「白衣御史」印（46）

⑥「華胥國王之璽」印（59）

⑦「隠居放言」印（62）

①の「水哉」は、履軒の私塾「水哉館」にちなむ。履軒は三十代半ばに懐徳堂から独立して私塾水哉館を営み、膨大かつ精緻な古典研究を推進した。「水哉」という言葉は、いくつかの古典に見える。



まず、孔子の言葉として次のようなことが伝えられている。『孟子』離婁篇下に、孟子の弟子の徐子と孟子との問答が次のように見える。

徐子曰く、仲尼亟水を称して曰く、水なる哉、水なる哉と。何をか水に取れる。孟子曰く、原泉は混混として昼夜を舍かず。科を盈たして後に進み、四海に放る。本有る者は是くの如し。是れ之を取るのみ。（徐子曰、仲尼亟称於水、曰水哉水哉。何取於水也。孟子曰、原泉混混不舍昼夜、盈科而後進、放乎四海、有本者如是、是之取爾。）

水は、こんこんと源泉からあふれ出し、ひとときも休むことなく川の流れを作り、ついには海に注ぐ。孔子は、この水に思いを致し、しばしば水を讃えていたという。これによれば、「水哉」とは、たゆみのない持続的な学問研究の姿勢を、常にわき出て止まない水に喩えたものと言える。

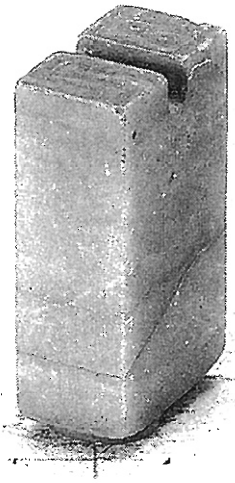
ところが、道家の文献にも、これとはやや異なる「水哉」が見える。『荘子』刻意篇には、「水の性は、雑えざれば則ち清く、動かすこと莫ければ則ち平らかなり」と見える。つまり、世俗と交わらず不動の境地でいれば、心は清く、正平を保てるという意味である。水は外物とまざると濁り、かき乱されれば大きく波打ってしまう。だが、清く、平らかであることも、その本来の性として可能なのである。

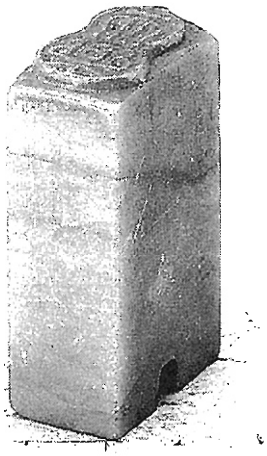
履軒の「水哉」印ははたしてどちらの意をより強く込めているであろうか。いずれにしても、この印は、懐徳堂印の中では唯一のガラス製である。しかも、紐の部分は、水の流れを髣髴とさせる流線的な装飾がほどこされている。紐の頭頂部から印面部に向かって、水が螺

旋状に流れ落ちているかのようである。印文も、楕円形の単郭の中に、円転の陽刻の文字が刻まれている。うねるような「水」の文字が印象的である。また、大江文城の『懐徳堂印存』七冊本の注記によれば、この印は「瓶栓」をかたどっているという。なるほど、ワインなど西洋のお酒の瓶の栓のようにも見える。ひょっとするとそうした舶来の文物に刺激され、造形されたのかもしれない。

なお、同じく「水哉」と刻んだ印は、懐徳堂文庫の中に計九顆が現存している。履軒の印の中でも、最も多用された印文である。

②の「天樂」は、履軒の私塾の二階の一室の名である。履軒は、安永８年（1779）に再婚した後、借家の二階の一室を「天楽楼（てんらくろう）」と名づけた。これは、『荘子』天道篇の「人と和する者は、之を人楽と謂（い）い、天と和する者は、之を天楽と謂う」（與人和者、謂之人樂、與天和者、謂之天樂）にちなむものである。『荘子』は、人間同士が和することを「人楽」と言うのに対して、人が天の自然と和する境地を「天楽」と評した。そして、この天の楽しさをわきまえた者は、生きているときには自然のままに振る舞い、死んでいくときには万物の変化に従い、静かにしているときには陰の気と徳を同じくし、動いているときには陽の気と波を同じくする、と説いた。履軒はこの言葉を書斎の名としたのである。





この印は陽刻で瓢箪型をした珍しい印であるが、さらに興味深いのは、「幽」「人」という陰刻の連印（38）と両面印を形成している点である。「天楽」と「幽人」とは共通する心境の表裏なのであろう。

また、③の「醉郷侯印」印も、世俗を超越した履軒の心境を物語っているように思われる。「醉」という字は酒を連想させるが、西村天囚『懐徳堂考』によれば、履軒は大いに酒を嗜んだようである。机のまわりには備前徳利が置かれていて、書を読み興がわいてくると酒を飲んだという。また、入門してきた書生には、まず酒を飲む稽古をせよ。勉強ばかりしていると気が詰まって病気になるぞ、と説いたという。だが、履軒は単なる大酒飲みではなかった。養生には努めていたようである。ある人が履軒に養生法を問うと、履軒は、毎晩寝床につくとき、力を込めて三度足を伸ばす、といったそうである。今で言うストレッチ、呼吸法であろうか。履軒は、八十六歳という長寿を保ったが、それは、一見破天荒に見える履軒の人生も、実は適度な寡欲節酒によって維持されていたからである。履軒には、人体解剖図説である『越俎弄筆』や、身体観・病原観を記した『老婆心』という著作もある。

④の「南柯守印」は、南柯の夢の故事に基づく語である。唐の淳于棼が酒に酔って槐の木の下で眠りについた。夢の中で槐安国に行き南柯太守となって栄華を極めたが、夢から覚めてみると、そばには蟻の穴があるばかりであった。唐の李公佐の小説「南柯記」（南柯太守伝）に見える話である。履軒は精力的な経学研究を続ける一方で、この俗世の虚しさを達観していたのであろうか。人生は所詮夢にすぎないという思いが伝わってくるようである。

⑤の「白衣御史」印も履軒の立場を表している。「白衣」は無位無冠の意、あるいは無位無冠でありながら実質的には「御史」と変わらぬような立派な人の意である。「御史」とは、もともと古代中国周代の天子の秘書官を意味していたが、秦漢時代には、今の警察庁のような役所の意味となり、その長官を「御史大夫」と呼んだ。履軒は、豊かな学識を持ちながらも無位無冠であることを、むしろ誇りに思っていたのである。

3．華胥国の王

履軒はまた、そうした自分を「華胥国王」と呼んだ。⑥の「華胥國王之璽」はその印である。安永九年（1780）、大坂南本町一丁目に転居した履軒は、その住居に「華胥国門」の扁額

を掲げ、自らを華胥国王に擬した。「華胥国」とは、中国の伝説的な皇帝であった黄帝が夢の中で遊んだという理想国で、そこでは身分の上下がなく、民には愛憎の心がなく、利害の対立もなく、自然のままであったという。その故事は『列子』黄帝篇に次のように記されている。

（黄帝）昼寝て夢み、華胥氏の国に遊ぶ。……其の国師長無く、自然なるのみ。其の民嗜欲無く、自然なるのみ。生を楽しむを知らず、死を悪むを知らず、故に夭殤無し。己を親しむを知らず、物を疏んずるを知らず、故に愛憎無し。背逆を知らず、向順を知らず、故に利害無し。（晝寢而夢、遊於華胥氏之國。……其國無師長、自然而已。其民無嗜慾、自然而已。不知樂生、不知惡死、故無夭殤。不知親己、不知疏物、故無愛憎。不知背逆、不知向順、故無利害。）

黄帝は、この夢から覚めた後、大いに悟るところがあり、その後、二十八年間、天下は大いに治まって、ほとんど華胥国のようであったという。また、黄帝が崩御した際、民は黄帝の治を慕って泣き叫び、その悲しみは二百年間続いたという。

履軒はこうした境地に身を置いて、通説にとらわれない斬新な研究を進めていったのである。ちなみに、「華胥国」の名を持つ履軒の業績として、経世については、「華胥国物語」、天文学では「華胥国暦」、歌文では「華胥国囈語」「華胥国歌合」などがある。

最後に、⑦の「隠居放言」は、そうした自らの姿を、やや諧謔的に記したものであろう。西村天囚の『懐徳堂考』に、「履軒嘗て人に謂て曰く、聖人の徳企て及ぶべからず。若し夫れ隠居放言して、身は清に中り、廃しては権に中るは、吾儕の地位なり」と記されている。聖人の徳には及ばないが、隠居放言して、清廉潔白な身を保ち、引退してからも正しい道を歩む人は、私のともがらであるというのである。超然として自由な立場で放言する自分を、履軒は冷静に見つめていたのである。

このように、履軒の印は、先に検討した竹山の印とは好対照をなしている。竹山の印が懐徳堂学主としての面目を表明するものであったのに対して、履軒の印は、自らを華胥国王と呼んで天楽の境地に遊んだ、その心の内を語るものであった。また、印の造形という点でも、両者はきわめて対照的である。竹山の印が高名な篆刻家の制作による重厚な方形印が多いの

に対して、履軒のそれは、連印あり、両面印あり、瓢箪型あり、象の紐あり、子母印あり、と多彩である。世俗を超越して自由な境地に心を遊ばせた履軒の印として、誠にふさわしいと言えるであろう。

4．中井履軒印データベース凡例

①懐徳堂文庫に残されている中井履軒の印章を対象として、その情報をデータベースとして提示する。

②項目の通し番号は、「昭番」と「大番」とからなる。「昭番」とは、昭和15年（1940）に刊行された『懐徳堂印存』増補改訂版三冊本の中井履軒印について、便宜上、先頭から筆者が割り振った番号である。同様に、「大番」とは、大正元年（1912）刊行の『懐徳堂印存』の通し番号である。このデータベースで、昭和版の通し番号を基礎とするのは、昭和版の方がより完備した印譜だからである。『懐徳堂印存』の詳細については、拙稿「懐徳堂の小宇宙―懐徳堂印の研究―」（『中国学の十字路』、研文出版、2006年）、および『懐徳堂の印章』（湯浅邦弘編著、大阪大学大学院文学研究科、2007年）参照。

③データベースの項目は、「釈文」「篆刻者」「材質」「刻状」「形状」「特殊形態」「輪郭」「法量」「印存注記」「大江文城書き入れ」からなる。まず篆刻された文字を「釈文」によって示し、次に、「篆刻者」が分かっているものについては、その人名を記す。「材質」は、『懐徳堂印存』の注記に従う。特に注記のないものは石印である。「刻状」は陰刻（白文）か陽刻（朱文）かを記す。形状は、印面の形を「方形」「長方形」「円形」「楕円形」などに区分して記す。特に記載のないものは「方形」印である。履軒印の中には、天地両面に印を刻むものがあり、これを両面印という。また、大小二つの印が入れ子になっているものがあり、これを子母印という。そうした場合は、「特殊形態」として特記する。「輪郭」は、印の輪郭の状況を記す。通常は「単郭」、ないものは「無郭」、輪郭が線ではなく図案となっているものは「図案郭」と記す。「法量」は印面の縦×横のサイズをcm単位で記す。「大江文城書き入れ」とは、重建懐徳堂で講師を務めた大江文城が昭和版『懐徳堂印存』七冊本（懐徳堂文庫所蔵）に自筆で書き入れた注記であり、主に紐の材質に関わる情報である。

5．中井履軒印データベース

昭番	大番	釈文	篆刻者	材質	刻状	形状	特殊形状
1	8	水哉館		陶印	陽刻	長方形	
2	46	履道坦々幽人貞吉			陽刻	長方形	
3	47	幽人之貞		陶印	陰刻		
4	1	履軒		陶印	陽刻		
5	57	幽人貞吉			陰刻		
6	28	幽人之貞			陽刻		
7	2	積徳之印		水晶印	陰刻		両面印甲
8	3	幽人之貞		水晶印	陽刻		両面印乙
9	24	履道坦々　幽人貞吉			陰刻		両面印甲、連印
10	27	履道坦々　幽人貞吉			陽刻		両面印乙、連印
11	15	水哉			陽刻		両面印甲、連印
12	13	幽　人			陽刻		両面印乙、連印
13	59	葛印天民			陰刻		両面印甲
14	60	天懐氏			陽刻		両面印乙
15	32	幽人　處之			陽刻	半円形	両面印甲、連印
16	31	水哉			陽刻	長方形	両面印乙
17	5	幽人		陶印	陽刻	長方形	
18	48	幽人		竹印	陽刻	長方形	
19	19	幽　人		木印	陰刻		連印
20	43	水哉		木印	陽刻	円形	
21		水哉		磁印	陽刻	長方形	
22	17	水哉			陽刻	円形	
23	7	水　哉		陶印	陽刻		連印
24	55	水哉			陽刻	楕円形	両面印甲
25	50	水哉			陽刻	楕円形	両面印乙
26	37	水哉		玻璃印	陽刻	楕円形	
27	19	水哉			陽刻	長方形	
28		積徳之印		木印	陰刻		子母印子
29		處		木印	陽刻		子母印母
30	29	處			陽刻		
31	6	處	中井履軒	陶印	陽刻		
32	25	履道坦々		竹印	陰刻		
33	9	幽人貞吉		銅印	陰刻		
34	4	處　幽人之貞		陶印	陽刻		連印

輪郭	法量	大江文城書き入れ
単郭	5.2×3.2	紐、明和六年孟秋初吉
単郭	4.3×3.7	石印、木象紐
無郭	4.5×4.6	なし
単郭	5.3×5.3	亀紐、但頭部破損脱落
無郭	1.7×1.7	石印、仙人紐
単郭	3.7×3.6	石印、切石
無郭	1.8×1.9	なし
単郭	1.8×1.9	なし
無郭	上1.2×1.7／下1.2×1.7	石印
単郭	上1.2×1.6／下1.2×1.6	石印
単郭	0.8×0.8	石印
単郭	上0.7×0.8／下0.7×0.8	石印
無郭	1.7×1.7	石印
単郭	1.7×1.7	石印
単郭	上1.4×1.6／下1.4×1.6	（側款あり）
単郭	1.8×1.6	（側款あり）
単郭	2.9×2.3	象紐
単郭	1.6×1.0	なし
無郭	上1.3×1.6／下1.2×1.6	なし
図案郭	直径1.8	黒檀材
単郭	2.2×1.7	獣紐
単郭	直径1.6	石印（側款あり）
単郭	上1.6×2.4／下1.9×2.4	象紐
単郭	2.4×1.7	石印
単郭	2.4×1.7	石印
単郭	3.1×2.7	瓶栓
単郭	1.3×0.9	石印
無郭	2.1×2.0	なし（重複）
単郭	2.7×2.8	なし（重複）
単郭	2.1×2.1	石印
単郭	4.2×4.1	象紐、自製ノ款アリ
無郭	2.1×2.0	左顧象紐
無郭	2.5×2.5	なし
単郭	上1.1×1.8／下1.6×1.8	なし

昭番	大番	釈文	篆刻者	材質	刻状	形状	特殊形状
35	40	履軒幽人			陽刻		両面印甲
36	41	完			陽刻		両面印乙
37	14	天樂			陽刻	瓢箪型	両面印甲
38	16	幽　人			陰刻		両面印乙
39	26	履軒圖書	石樵		陽刻	長方形	
40	49	酔郷侯印			陰刻		
41	56	酔郷侯印			陰刻	円形	
42	58	酔郷侯印			陰刻		
43	39	尚徳積載	石樵		陰刻		両面印甲
44	38	既雨既處	石樵		陰刻		両面印乙
45	51	南柯守印			陰刻		
46	52	白衣御史			陰刻		
47	22	水哉			陽刻	円形	両面印甲
48	21	與古爲徒			陽刻	円形	両面印乙
49	11	德公			陽刻		両面印甲
50	12	德公			陽刻		両面印乙
51	18	德			陽刻		
52	42	恨古人不見我		陶印	陰刻	長方形	
53	10	天樂		銅印	陽刻		
54	36	不可登雲			陰刻		
55	35	處父			陰刻	長方形	
56		四天王寺古瓦			陰刻		55の側款
57	20	叔			陰刻		両面印甲
58	23	完			陰刻		両面印乙
59	62	華胥國王之璽			陰刻		
60	45	蝶			陽刻		両面印甲
61	44	戲			陽刻		両面印乙
62	61	隱居放言			陰刻		
63	33	全交舍		木印	陽刻	長方形	
64	30	既雨既處尚徳積載			陽刻	長方形	
65	53	古之遺狂		銅印	陰刻		
66	34	我思古人		銅印	陽刻	長方形	
67	63	君子萬年		陶印	陽刻		
68	54	漢委奴國王		銅印	陰刻		

輪郭	法量	大江文城書き入れ
単郭	1.4×1.4	なし
単郭	1.4×1.4	なし
単郭	1.2×0.7	なし
無郭	上0.6×0.8／下0.6×0.8	なし
単郭	2.3×1.7	石印木紐
無郭	1.6×1.7	石印
無郭	直径2.2	石印木紐
無郭	2.1×2.0	石印
無郭	1.8×1.9	石印
無郭	1.8×1.9	石印
無郭	2.4×2.4	石印木方紐
無郭	2.4×2.4	石印木方紐
単郭	直径1.3	石印
単郭	直径1.4	石印
単郭	0.6×0.6	石印
単郭	0.6×0.6	石印
単郭	0.9×0.9	石印
無郭	2.8×2.1	紐脱落破損
単郭	2.6×2.7	環紐
無郭	2.3×2.0	獣紐
無郭	2.2×2.7	なし
無郭		なし
無郭	1.0×1.0	石印
無郭	1.0×1.0	石印
無郭	3.1×3.1	石印
単郭	1.5×1.6	石印
単郭	1.5×1.6	石印
無郭	1.8×1.8	石印
単郭	4.0×1.8	なし
単郭	3.7×3.0	石印
無郭	2.3×2.4	環紐
単郭	2.5×1.8	兎紐
単郭	5.1×5.2	自製
無郭	2.4×2.4	蛇紐、摸印